

14

# 小学校における 英語教育へのアプローチ

—英語を楽しむ子どもたちを育てよう—



第

19

分科会

兵庫県教職員組合  
加西支部

日吉小学校分会  
近都勝豊

# 小学校における英語学習へのアプローチ

## I 英語学習のねらい

国際化、情報化、科学技術などが一層進展する変化の激しい時代の中で、学校においては、これらの変化に的確かつ敏速に対応する教育の必要性が高まっている。このような背景の下に、各学校がゆとりの中で特色ある教育を開拓し、子どもたちに豊かな人間性や社会性を養い、基礎・基本の確実な定着を図るとともに、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を培うことを基本的なねらいとして、学習指導要領が改訂された。このようなねらいの下、各学校が、地域や学校、子どもの実態に応じて横断的・総合的な学習や子どもの興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行う「総合的な学習の時間」が創設された。

「総合的な学習の時間」では、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、子どもの興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとしている。

ここでは、「総合的な学習の時間」の中で国際理解に関する学習を行う場合のねらい、また、その方法、さらに国際理解に関する学習の一環として「外国語会話」、特に「英会話」を行う場合のねらい等について述べることとする。

### 1 「国際理解」と「外国語会話」の関係

#### (1) 「国際理解」のねらい

国際化の進展に伴い、国際社会の中で日本人としての自覚を持ち、主体的に生きていく上で必要な資質や能力を養うことが求められている。さらに国際化は、国家間の関係のみならず個人と個人の相互交流へと深まりつつある。

第15期中央教育審議会の答申（平成8年7月）では、国際化に対応する教育を進める上での留意点として、次の3点を挙げている。

- ①広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。
- ②国際理解のためにも、日本人として、また、個人としての自己の確立を

図ること。

③国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること。

このように、国際理解は異文化を知ることだけにとどまらず、異文化を知ることを通して自国の文化を知り、さらに単に知識の習得だけを目的とするのではなく、「行動する能力を習得する」ことがねらいとされている。すなわち子どもが頭だけで学ぶのではなく、体験的な学習や問題解決的な学習などを多く取り入れ、実践的な能力や資質、また、態度を育成していくことが求められているといえる。

さらに、3点目の留意点では、外国語によるコミュニケーション能力の育成が求められている。国際理解における「外国語会話」は行動する能力を育成する上でも大きな役割を持ち、これからの国際理解を進める上で、重要な要素となっている。

## (2) 「外国語会話」と「英会話学習」

小学校学習指導要領では、「総合的な学習の時間」において外国語会話等を行うにあたっての配慮事項として、次のように述べている。

「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行うときは、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること。」

言語は、人々が互いの意思を通じ合わせるため、様々な地域において発生し、発達したものである。すなわち言語そのものが、それぞれの地域の文化をより的確に表現している。したがって、「外国語会話」を体験することによって、国際理解に関する意識も自然に芽生えていくことが期待される。

「外国語会話」とは、諸外国の様々な言葉を使った意思の疎通を図るための会話である。現在、世界の多くの場面で使用されている言語であることや子どもが学習する際の負担等を考慮して、「英会話」が取り上げられることが多い。

## 2 「英語学習」のねらいと日吉小の学習の在り方

### (1) 小学校における「英語学習」のねらい

児童期は、新たな事象に関する興味・関心が強く、言語をはじめとして、異文化に関しても自然に受け入れられる時期にある。このような時期に英語に触れることは、コミュニケーション能力を育てる上でも、国際理解を深める上でも大変重要な体験になる。「英語活動」そのものが異文化に触れる体験となり、さらに、外国人や文化にかかわろうとするときの手段として、英語を活用しようとする態度を育成することにもつながる。すなわち、言語習得を主な目的とするのではなく、興味・関心や意欲の育成をねらうことが重要である。

しかし、ほとんどの子どもが、初めて母国語以外の言語に触れるという実態から、負担感を持たせたり、興味・関心を失うような活動内容になったりすることは、英語嫌いを作ることにもなりかねない。子どもの活動意欲を高め、英語への嫌悪感を持たせないような活動を工夫していくためには、子どもの実態をとらえ「子どもにとって身近な英語」を把握し、子どもの「したい」「言いたい」ことを、子どもの態度などから判断し活動内容に生かし教材化していくことが大切であると考える。

### (2) 子どもの日常生活に身近な英語を扱う

中学校の英語の指導内容は、中学生の発達段階に応じて系統立てて構成されている。中学生期と児童期の発達段階の差や「総合的な学習の時間」のねらいを踏まえると、中学校の学習内容を先取りするようなことは避けなければならない。小学校では、子どもの日常生活の中の身近な英語を扱うことに重点を置き、楽しさの中に英語に慣れ親しむことができるよう工夫することが大切であると考える。

### (3) 音声を中心とした活動を行う

コミュニケーションは、主に音声と文字を媒体として行われる。しかし、英語の文字と音声を同時に媒体として意思の伝達を図ろうとすることは、小学校の子どもにとっては、負担が大き過ぎて、英語嫌いを生み出すことにつながる

と考えた。

小学校において子どもが英語に慣れ親しんでいく過程を観察してみると、英語の音声だけで十分にコミュニケーションを図ることができると言えよう。さらに、音声による言葉だけでなく身振り手振りや表情などによっても、意思を伝達できるものである。

このようなことから、日吉小学校の英語活動においては、身近で簡単な英語を聞いたり、話したりする活動を中心に行っていくこととした。

聞く活動においては、子どもにとって日本語と似ている音もあれば、微妙に違う音や大きく異なる音もあり、その連続である英語をたくさん聞く機会をつくりうとしている。そして、これらの新しい音に慣れるとともに、日本語の音との違いに気付き、それを模倣できればと期待している。

#### (4) 英語活動で取り入れる学習内容と活動

まず子どもの主体的な活動への参加を促すことが大切である。また、実際の体験や擬似体験を通して、英語に親しんでいくような配慮が必要である。英語活動は体験的な活動として展開されることから、じっと座ったままではなく、子どもが実際に体を動かしながら、英語を聞いたり話したりするような活動が大切であると考えた。さらに、あいさつや歌、ゲームなど子どもが自然に英語で話せるような活動を中心に学習を進めることを計画した。

単調な繰返しによるドリル学習は、「総合的な学習の時間のねらいにそぐわない。」「子どもの意欲や積極性を引き出すことが難しい。」と考えられることもあるが、本校の児童の様子から判断して、英語学習については、同様の内容を繰り返すことで、子どもたちに安心感を与えるがあるとの意見も出された。



## II どのような英語を扱うのか

小学校英語活動において大切なことは、子どもが英語に興味を持ち、英語を聞き、また、英語で何かを表現できるという満足感を持たせることであると考える。子どもがいつまでも「英語が好きだ」という気持ちを持ち続けることが大切である。そのためには、どのような素材や言語材料を扱うのかが大切な要素となる。

### 1 内容を決める際のポイント

#### (1) 音声を中心とする

前にも述べたとおり、音声を中心とした指導とすることが必要である。英語活動を行う際に、「生きた英語」をたっぷりと聞くことによって、英語の音声に慣れることができることが大切である。子どもの英語学習の状況をつぶさに観察すると、まずアダムさんの表情豊かな、また、身振りたっぷりの英語をじっと聞き、内容がおぼろげにも分かってくるとアダムさんの英語に合わせて自分も体を動かし始め、さらには待ちきれなくなってまねをして話し出すという様子である。

小学校段階では、音声と文字とを切り離して、音声を中心とした指導を心がけることが大切であると考える。

#### (2) 子どもの「言いたいこと」「したいこと」を扱う

子どもの発言や行動を目撃から観察することによって、子どもの身の回りのもの、家庭や学校生活に即した日常的なものの中から子どもの興味・関心の高いものを扱う必要があると考える。「教師が教えたい英語」ではなく、「子どもが言いたいことがら」を扱うということである。

これまでの学習内容はいずれも子どもにとって身近なものが多く、多くの児童が興味もって学習に参加している。

また2学期からは、アダムさんが週1回の活動終了時に、次回の学習に対する子どもたちの希望を聞いている。

### (3) 既知のものでも新たな発見をもたらす話題等を扱う

日本と外国の文化や生活の異同が比較できるもの、タイムリーな話題、データ、タオル、ハンカチ、チョコレートなどといった英語からの外来語、ナイター、ワープロといった和製英語などを話題に取り上げ、発音の違いや意味するものの違いなどについて、子どもの好奇心をくすぐることができる。

子どもが既に知っている物語を聞かせたり、あるいは、初めての話を聞かせたりすることによって、既知や未知にかかわらず、子どもにとって新たな発見をもたらすものに触れさせることが大切である。

### (4) 外国人の表現や身振りの中から、文化の違いに気付かせる

英語をはじめ外国語に触れるることは、言葉だけでなく身振りや考え方なども含めて、子どもにとっては新しい世界に触ることである。外国の大人が名前や年齢を直接聞かれることのとまどいや、手の平を下に向けて指を動かす身振りが、日本人と外国人では、その意味が「こっちへおいで」と「あっちへ行きなさい」というように逆転するなど、国際感覚を磨く材料を授業の中に見いだすこと也可能である。

外国人とのティーム・ティーチングを通して、子どもたちは新たな視点で言葉や身振りや考え方や表現の仕方などの違いを知らず知らずのうちに身に付けていっていることを感じる。

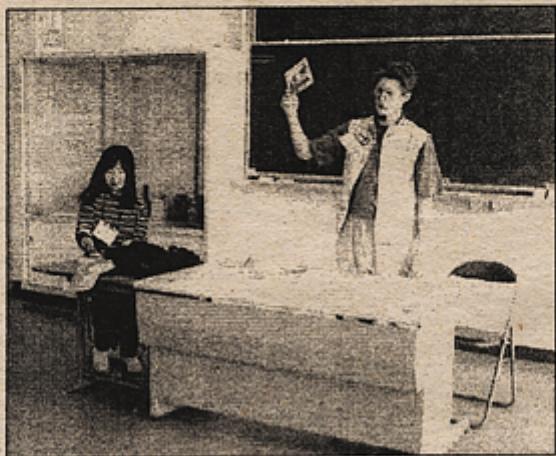


### III これまでの取り組み

#### 1 英語講師アダムさん

マイケル=アダム=ウィップルさん（28歳）

兵庫県西脇市在住 アメリカ生まれ



以前より少人数の塾形式のものを自宅で運営されていた。西脇市の中学校へボランティアとしてクラブ活動に参加された経験がある。クラス単位、全校を通して英語学習を受け持つのは全くの初めての経験である。

学習が始まって間もない頃は、互いにぎこちなさもあったが、学習の回数を重ねるにつれて、子どももア

ダムさんもお互いを受け入れ、和やかな雰囲気の学習がスタートした。

#### 2 学習のようす

##### (1) English Room

主な学習の場として English Room を用意した。世界地図、ポスター、アルファベット表など市販のものを用意するとともに、学習中にでてきた単語やフレーズを整理して掲示している。

##### (2) 担任の役割

英語の時間は、基本的にアダムさんと学級担任とのT・Tの授業形態である。多くの学習では、担任も子どもたちと共にアダムさんの英語を聞いて理解しようとする学習者になる。子どもと一緒に英語を復唱し、ゲームにも参加することで、子どもたちの緊張を解きほぐしている。また、新しい内容やゲームなどでは、アダムさんから一番に指名されるなどして、「英語であてられる。」という緊張感の中で、子どもたちと共に英語を学んでいる。

アダムさんの教室内での会話は、比較的ゆっくりとしたものであるが、日本人向けと感じるようなレベルではない。そのため、子どもたちは内容がわからず困る場面も見られる。そのようなとき、子どもたちは担任の方を助けを求め

るような目で見るが、正直なところ担任もわからないことが多い。そのようなとき、担任ははっきりと“ I don't know.” と返事することで、わからないことははっきりと「わからない」と言うことが大切だという姿勢を子どもたちに見せようとしている。

### (3) 記録簿

全く手探りの状態でスタートした本年度の学習であるので、担任が毎回の学習の記録簿をつけることにした。学習内容はアダムさん、学校側の職員、さらには子どもたちの反応などを踏まえ、かなり臨機応変に変化している。この1年の活動をまとめることができ、1年後にはカリキュラムの基礎になるのではないかと考えている。

しばらく綴っていく内に、英語の学習しているのに日本語だけが記入されていっているのも妙な感じがする。学習時間中に出た英語ももっと記録しようという意見が出た。子どもたちは音声中心であるが、指導する側の教師は、文字にも積極的に触れていくことである。

#### 記録簿から

第1回 あいさつの練習、動物、果物、野菜、乗り物などの名前カードを見て英語の響きに親しむ

第2・3回 ゲーム (HEAD SHULDER KNEES AND TOES)

第4回 カードを見て、英語のあいさつを一人で答える。

第5・6回 ゲーム(Fruit Basket)体育館にて

第7回 ユタ州の風景や町の様子について

第8回 プールにて SHARK GAME

第9回 英語の歌 (A B C の歌)

第10回 あいさつの言葉

第11回 アルファベット

第12回 アルファベット

第13回 あいさつの復習、アメリカの現状について

(4) 子どもたちの反応

記録簿より（担任の印象）

楽しく授業を受けていた。長い単語になると聞き取れず「わからない。」と訴える場面も。子どもの様子に合わせて簡単な言い方を教えてもらったりした。  
最後には握手をせがんだ。

(5／15・1年)

全体の学習が始まる前に、総合学習でアメリカについて調べている子どもたちが、アラスカ州のことを質問していた。

(5／22・5年)

フルーツバスケットでやったくだものの名前はよく覚えていた。次週、アニマルバスケットをするという予告があり、楽しみにしている。

(6／19・3年)

きょうはプールということでおおよろこびだった。”シャークタッグ”ゲームを通して、アダム先生と親しく接することができてよかったです。

(7／5・4年)



日常聞き慣れている「あいさつ」はしっかりと発音できていた。曜日、月も  
知っている言葉に対する反応は早い。  
(9/6・6年)

自分のネームプレートの中にどんなアルファベットがあるのか、表からさが  
しあてるという学習ルールがわかってからは、自発的に手を挙げる子が多数あ  
った。  
(9/18・2年)

【子どもたちのノートより】

英語の先生が日吉小学校へ	今日、私がドキドキしてた日です。	「うう・きんちょうするう。	と、心の中で思ってました。すると、	みんながまいったヨアすね、はくしゃでおむがえしましょう。」	「バチバチバチ…」	そのとき、私は、心でうの立つが、バクバク!! 聴こえてきました。	そして、フリーに!!	「グッドモーニング!! Mr.マイケル・アダム」心の中では、	「うれし。かんじんな、名前まちがえた――」。	私は、自分のことを覚えてなリくらり、きちんとちょうしてリたー。	でも、アダムさんは、ややしく笑ってくれました。	「ほ、お」	いまは、早く、じゅぎょうを、受けてみたば。	それから、2回もあくしゅしたよ。	児童の中ではじめて、あくしゅじたしー。うれしー。	うきるだけ早くなじみた!!。	それから、どんな、じゅぎょうをするかたのしー。
--------------	------------------	---------------	-------------------	-------------------------------	-----------	----------------------------------	------------	--------------------------------	------------------------	---------------------------------	-------------------------	-------	-----------------------	------------------	--------------------------	----------------	-------------------------

ようしく アダムさん。

今日、全校集会で、とつても…出会いをしました。  
朝、全校集会がまちどうしくてまうどうしてたま  
りませんひした。

やさしいんだろか、きびしいんだろかと思つて、うれしさとちょ  
と不思じいぱぱでした。

トキドキドキドキ・す、とそんな気持ちが心の中によりまし  
た。

出会い、てみるど、やさしそうな顔で、ニコニコして  
てこつちまごニコニコしちゃいそうひした。

英語もすこかつたです。  
そんげいしゃいました。

きのう、アダムさんと給食をたべました。あまり席が  
近くなかつたので、しゃべれませんでした。それで、ごち  
そうさまをしてから、サインをしてもらつたり、めんきょ  
しょを見せてもらつたりしました。それから花を職員  
室にもついく時に、アダムさんといはいしゃべりました。  
朝ひばんは何を食べてきましたかななど、いふゆい質問しま  
した。おもしろかったです。もつといはいしゃべりました  
かうです。

### (5) 給食の時間の音楽

英語の学習が毎週火曜日と木曜日に設定されていることを受けて、これらの日は昼の放送において英語の曲を流すこととした。幼児用の絵本などを参考にしながら、集めたもので、これらの曲もその歌詞を理解しようというような目的ではなく、英語の響きや音に親しむ手助けになればという考え方である。また3・4校時に行われた英語学習が終わったあとに流れるため、その日の学習に余韻を持たせるような効果も感じられる。また最近では、曜日の言い方を歌の調子で、楽しそうに口ずさむ子どもが見られるなどして、うれしく思っている。

(6) 平成13年度総合的な学習の時間年間カリキュラムにおける  
英語学習のねらいと学習内容

	ね ら い	学 習 内 容
低学年	英語の響きに慣れ、親しむことができる。	英語であいさつする。 英語を使ってゲームをしたり、歌ったりする。
中学年	英語に慣れ、外国人に話しかけようとする。	英語であいさつする。 英語を使ってゲームをしたり、歌ったりする。
高学年	簡単な英会話を楽しみ、進んで外国人とコミュニケーションしようとする。	歌やゲームなどを通して、英会話を親しむ。 進んで外国人と一緒にコミュニケーションを深めようとする。

各学級、週1回、20分モジュール、

(7) 職員の研修会 「アダムさんと話そう会」

夏季休業中に、職員が、アダムさんと学習内容以外の雑談、おしゃべりをするという時間を設けた。持ち時間は一人10分程度で、アダムさん一人に対して職員二名程度で話す場をつくり、英語によるコミュニケーションに挑戦した。職員側は、話題提供のために写真を用意したり、趣味のアイテムを持参するものなど積極的な姿勢でのぞむことができた。

アダムさんは次から次へとほぼ一方的に不完全な英語で話し�込まれ、かなり疲れた様子であったが、この会によって、職員一人一人に対してずいぶん親しみを持ってもらえたように思う。また職員側には、これまで最小限度の会話しかアダムさんとしてこなかった者も、「自分の英語が通じるんだ。」という気持ちになり、2学期からの授業形態、担任以外のサポートなし、アダムさんと担任のみでの英語学習に弾みがついた。

### (8) 実践的コミュニケーション能力の育成

夏季休業中にアダムさんを交えて、兵庫教育大学の高島英幸先生と職員研修を行った。先生は実践的コミュニケーション能力の育成を中心に英語学習を開かれている。今すぐ本校の小学生にそのまま適応させることは難しいが、学習を重ね、英語の力が高まってきたとき、より実践的な力を身につける方法であると認識した。



## IV 国際理解と英語学習

総合的な学習の時間における「国際理解」の学習には、「英語活動」の外に「国際交流活動」と「調べ学習」があげられる。「国際交流活動」は、様々な学校行事や地域の外国人との直接の交流を通して、様々な言葉や文化に触れたりしながら、子どもの国際感覚を磨く活動である。「調べ学習」は、子どもの興味・関心を基にして、外国の生活や文化などについて調べたり発表したりする活動である。これらの活動は、いずれも国際理解を進める上で有効な方法であり、相互に有機的な関連を図りながら取り上げていくことが望まれる。例えば、「外国語会話」で培ったコミュニケーション能力や外国語への興味・関心を「国際交流活動」での外国人とのかかわりの中で生かしたり、「国際交流活動」での体験を生かし、コミュニケーションを図る上で、自分が表現したい言葉を見つけ、「外国語会話」での活動に取り入れるなどの関連が考えられる。

また「外国語会話」で触れた異文化への興味・関心の高まりを「調べ学習」

の素材選びへつなげるなど、その関連と広がりは、子どもの学びの拡大へつながっていくものである。いずれの学習活動に取り組む場合も、子どもの体験的な学習、問題解決的な学習としての性格を重視しなければならないだろう。

今後の発展を考えたとき、国際理解教育の一環であるので、英語の学習だけでなくさらに、広い範囲の国際理解の学習に発展することが望まれる。「国際交流活動」や「調べ学習」では、アジアを含む様々な国々の文化やあいさつなどの簡単な言葉に触れる活動を行うことも期待される。

本年度、日吉小学校では、学年当初より全学年、英語学習に取り組んできた。その中で5年生は国際理解をテーマとし、1学期より中国やインド、アメリカなどの国について、学校内の資料や夏休み中に自主的に収集した資料をもとに調べ学習を進めてきた。アメリカについて調べるグループではアダムさんに直接ファッションや食べ物についてインタビューすることもできた。

これらの調べ学習の発展として、10月30日に神戸でのフィールドワークを計画し、神戸で体験できる異文化に実際に触れようと考えている。レストランでその国独自の料理を食べたり、店で働く外国人の話を聞いたり、ファッションや食材に触れながら、異文化についての理解を深めたいと考えている。英語学習でも同様であるが、実体験や一人一人の子どもの成功体験に勝るものはないと考える。アダムさんとの英語学習によって身につけた異文化に対する気持ちを持って、神戸の町で異文化を積極的に体験してみようする子どもたちの姿を期待している。

今後、小学校で行われる英語教育が、国際理解教育と別々に存在することなく、深く結びついたものになること。さらには国際理解教育と一体化したものにならなければならないと考える。

## V 現在までの反省と今後の課題

1年目は何をしても、すべての子どもにとって初めてのことばかりである。本年度は学年ごと、多少レベルの違いはあるものの、全学年ほぼ同様の内容で学習している。（できている。）次年度（2年目）、どのように発展させるかが難しい。

小学校の英語教育は「忘れてもよい。」「記憶を評価しない。」とされるが、はっきりした足跡、つまり目に見えるような学習の成果がほしいという声もある。英語学習への過度の期待や競争心が、小学校での英語教育、本来のあり方をゆがめないよう十分な配慮も忘れてはならない。

平成13年度、加西市の小学校で2校だけのモデル事業であるが、来年度、事業が継続されるか、今後、市内全小学校に事業が拡大されるかといった点が不透明である。

